

CONTENTS

- 1 ●平成29年度立正大学FD活動を振り返って
- 2・3 ●学士課程教育の質保証へ向けて
——初年次教育・導入教育から学士課程教育への展開——
- 4・5 ●学生の積極性を高める取り組み
- 6 ●アンケート結果報告
- 7 ●2017（平成29）年度外部評価委員会報告
- 8 ●FD研修会——立正大学付属立正中学・高等学校見学——

Rissho University FD News Letter

Vol.20
March, 2018

平成29年度立正大学FD活動を振り返って

FD担当副学長 池上 悟

平成29年度における立正大学のFD活動は、「学士課程教育の質保証へ向けて—初年次教育・導入教育から学士過程教育への展開—」を年間テーマに設定して実施しました。高大接続改革が求められる昨今、高等教育での学修を支える基礎学力の獲得や大学教育での学び方に配慮した導入教育等、初年次段階でのフォローアップが課題となっています。こうした取り組みは学修成果の向上はもとより、退学抑止の意味合いからも重要視されており、学びに対する動機付けとしての役割も期待されています。

本年度は全学FD活動として、新任教職員研修会と2回のFDフォーラムの開催、そして本誌『FD NEWS LETTER』を2回発行しました。

新任教職員研修会は、教職員合同研修として教員18名、職員9名が参加しました。理事長、学長をはじめとする役員が講師を務め、建学の精神と立正大学の伝統、現状と課題、そして将来構想の共有を図りました。また、参加者間の交友を深め、教職協働の基盤として一定の成果を挙げています。

FDフォーラムの第1回は、昨年度授業改善アンケート調査の結果「立正大学ベスト・クラス賞」を受賞した教員による授業実践例を報告し、他教員の参考に供しました。第2回は年間テーマに沿って「文学部一年生必修科目『基礎英語』改革4年間の状況とその課題」と題して開催しました。全学部で英語教育を行っている本学において、特に初年次における実験的取り組みの報告は高い関心を得て、例年になく多くの参加者による情報交換がなされました。また4年間を通じた英語教育の必要性や、日常生活にとどまらず専門教育の学びを深めるための英語学習といった具体的な提言がなされ、充実の内容となりました。

本誌においても学部独自の初年次教育・導入教育に関する取り組み事例を掲載しました。その目的や成果だけでなく、学生の実態や課題を共有することで、学部間の相互作用による今後の改善・向上が期待されます。

FD活動は不断の努力が必要です。「改革なくして発展なし」を基本として、明るい立正大学の未来を目指します。

心理学部の取り組み 教員インタビュー

「学士課程教育の質保証へ向けて—初年次教育・導入教育から学士課程教育への展開—」

心理学部臨床心理学科 田村 英恵 准教授
心理学部対人・社会心理学科 高橋 尚也 准教授



臨床心理学科 田村先生(左) 対人・社会心理学科 高橋先生(右)

—本日はお忙しいところお時間をいただきましてありがとうございます。初めに、全学的な初年次教育科目として位置づけられる「学修の基礎Ⅰ」「学修の基礎Ⅱ」について心理学部における取り組みをご紹介します

「学修の基礎Ⅰ」は、全学共通で使用するテキストから、特に建学の精神や大学生活を送るうえで遭いやすいリスクへの対応を中心に構成しています。建学の精神については仏教学部の先生にご協力をいただきその本懐に触れ、学生生活におけるリスクマネジメントにおいては、先輩学生の実例を挙げながら、回避・防御策を学びます。また、メンタルヘルスについても他学部と比較して時間を取って取扱い、安全かつ健康な学生生活を送るための素養を身に付けます。課題としては、対人・社会心理学科で110名、臨床心理学科で170名および再履修生で実施しているため、学修効果のあり方についてこれからも検討していかなければいけないと思っています。

「学修の基礎Ⅱ」は“専門教育への誘い”という全学共通の理念があります。また、心理学部では高等教育、特に専門教育の学修に必要なアカデミック・スキルの修得を目的とした「心理学基礎演習」「対人・社会心理学基礎演習」を学部設置当初から開設しています。心理学部では、「学修の基礎Ⅱ」と「基礎演習」を連動させ、同じ30名~40名のクラスで運営し、専門教育への導入や大学での学修方法習得をサポートしています。対人・社会心理学科では、図書館の利用方法を学ぶ際も基礎演習のクラスをさらに2グループに分けて図書館ツアーを行うなど、合理的に学修内容を配分しています。

—高校生までは心理学を明確な教科科目として学ぶこと

はないため、基礎演習は専門教育を学修するうえでの基幹科目になってくるかと思います。そのうえで、基礎演習の位置付け・役割はどのようなものですか

臨床心理学科では、心理学はこれまで学んでいない学問のため、本当の意味での導入として論文の検索方法や書き方等の基本的な部分を学ぶこと、また心理学の入り口に触れ、今後学生自身で研究していくにあたり必要なスキルを習得することを目標に置いています。

対人・社会心理学科では、基礎演習が英語の授業やプレゼンスキルの授業の単位にもなることから、クラスワークを意識しています。また、「心理統計法」の授業が1年次必修のため、つまづかないように基礎演習および学修の基礎Ⅱの授業内で復習の機会を設けるなど、カリキュラム運営上の柔軟性を持たせています。

—導入教育、初年次教育を考えると、新入生の学力をはじめとする特徴の変化はありますか

理系科目を苦手とする学生が多いことは昔から変わりません。統計という授業名を見ただけで苦手意識を持ち、「数学=苦手教科」と考える学生は多いです。ただ、理解すれば面白いと言ってくれる学生もおりますので、「数学は怖くない」ということをどのように伝え、苦手意識を克服していくかは課題であると思っています。

なお、対人・社会心理学科では統計の授業が1年生の必修科目です。学力・能力の面というよりも、やはり数字に対する苦手意識を強く持っているため、初年次教育のアプローチ方法を工夫し、意識改革させることを目指しています。

また、特別入試合格者が一般入試合格者と比較して、入学後の英語力に明確な差があることは以前からわかっていました。そのため、入学時の学力差を埋めるというよりは、英語に対する苦手意識を払拭し、入学後の学修をスムーズに進めることを目的として、来年度入学生から英語の入学前課題を導入しました。課題図書として『ずるい英語』という漫画、そして『アラジンと魔法のランプ』を採用しており、受験英語だけが英語ではないというマインドチェンジを狙いとして実施しています。

—学生の性格や特徴について、先生方がお持ちになっている印象はありますか

基本的に心理学という学問は、興味を持つきっかけがないと大学で学ぶまで至らないため、例えば臨床心理学科では、身近に障害を持っている方がいる等で心理学にたどり

着く学生は多いと思います。また、日常の社会生活の中でコミュニケーションが上手く出来ない等、自分自身が抱えている心理的な悩みを専門的に学びにくる学生もいます。そういった意味でも、比較的真面目で素直な学生が多く、人を支援したいと考えている学生が多いです。

対人・社会心理学科の学生も、基本は誠実で真面目な反面、外向きです。内面的な不安の解消を周囲からの承認に求め、自尊感情を高めたいと考える学生が多いように感じます。そのため、悪質商法やカルトといった学生生活に潜むリスクに対して、早い段階から意識を高く持つておくことが重要と考えています。

— オフィスアワー等、授業外での取り組みは何かありますか

臨床心理学科では、大学生活が始まって順調に生活が送れているか、授業が受けられているか、必修科目を落としていないか等、基本的なところで問題を抱えていそうな学生には、面談を行うことでフォローをしています。

対人・社会心理学科では、一例として基礎演習に出席しない学生がいた場合、他の必修科目も欠席していることが多いため、それらの情報から面談や指導が必要な学生を抽出し対応しています。また、独自に学内学会を組織し、会費を集めて学生チューターを雇用しています。そうすることで、主に統計学や実験科目について、学生が気軽に相談できる場面を作っています。

— 初年次教育・導入教育の役割とそれを通じて養いたい力があればお聞かせください

1つ目は、基礎演習クラスを中心に形成するコミュニティを通じた大学環境への適応だと思っています。2つ目は、学生が心理学に対して持っているイメージと、実際の学問としての心理学のギャップを埋めるため、科学的アプローチスキル（リサーチスキル）を身に付けること、3つ目は、学修成果や研究成果をどう見せるかというプレゼンテーションスキルを身に付けることです。スキルの修得には年次ごとの学修の積み重ねが必要ですから、導入部分でつまづかないよう支援しています。プレゼンが苦手な対人・社会心理学科を志望したという学生が多いため、初年次は苦手でも挑戦してみるということを実践しています。

— 養いたい力に対する成果実感はありますか

対人・社会心理学科の場合は、1年生で「プレゼンスキルトレーニング」の授業、3年生で「社会心理調査実習」の授業があり、石橋湛山記念講堂で発表する機会があります。4年生の卒業論文に関しても、優秀な学生はポスター発表をさせるという流れになっており、学年を経て段階を踏んでいることが特徴です。社会心理調査実習は卒業論文並みの内容をグループで行ってもらいますが、発表を聞いていると年々スキルが上がっていると感じます。様々な課題がそ



の都度課されますが、その過程で訓練されていくのだと思います。1年生で成果実感というわけではなく、段階を踏んでいくといつの間にかどの学生も出来るようになっていきます。ただ、課題を通して出来たことをどう個人の強みに昇華するか検討の余地があると思います。

臨床心理学科では、対人・社会心理学科ほど明確にプレゼン能力を身に付けることを目的とした科目は少ないですが、1年生の基礎演習の授業内で自己紹介のプレゼンを行ったり、2年生の「キャリアとライフ」の授業で実際に職業人にインタビューして、それをまとめて発表したりする等、各学年で段階を踏んでいきますので、成果としてははっきりとした形では見られないと思いますが、少しずつ身に付いている印象はあります。

— 今後の方向性やビジョンについてお聞かせください

臨床心理学科は、国家資格である公認心理師受験資格取得に向けたカリキュラム整備に着手しています。来年度の入学生から新カリキュラムが適用されるため、それを受講した学生が専門職として将来活躍できるように、求められる基準に適合したカリキュラム編成を行います。また、専門家を目指すだけでなく、人と接する場面で生きる様々な知識や必要とされる態度や姿勢を授業の中で学ぶことが出来ますので、専門職でなくても各々の分野で広く活用できる学問として、学生にはぜひ4年間で多くのことを身に付けてほしいと思っています。

対人・社会心理学科に限らず、一定程度社会的経験を積んだ人から見ると、導入科目のシラバスは非常に興味深い内容に感じるとと思います。それを18歳の学生にどれだけ面白そうに見せるのか、学問の魅力をどう伝えるのが重要であると感じています。この学科で学んだ内容が社会の中でどう活かされているのか、就職にどう役に立つのか等、学問と実社会との繋がりを見える化することを、授業に取り入れていくことが課題であると思っています。

— ありがとうございました

インタビュアー

学長室 総合経営企画課 大石大祐 相原百合絵

教員インタビュー

「学生の積極性を高める取り組み」

経営学部経営学科 本柳 亨 講師

〈インタビューの目的〉

授業改善アンケート結果より、教養的科目でありながら学生の高い授業参加意欲・積極性が見られた科目として、経営学部の本柳亨講師の「社会学A・B」を取り上げ、授業内容や手法等、「学生の積極性を高める取り組み」についてインタビューを実施しました。



経営学科 本柳先生

——経営学部における社会学の位置付けについて教えてください

私はマーケティング系列の教員として経営学部に所属していますが、専門分野は社会学で消費社会論を研究しています。経営学部の教養的科目には「社会学」（通年科目）が設置されていますので、専門の私がこの授業を担当しています。

——社会学の授業を实践するうえで主眼とされていることは何ですか。教養的科目でありながらも、学部専門領域とのつながりを意識して取り組まれているのですか

シンプルですが、面白い授業をすることです。「この先生の授業は面白い」という学生の期待や信頼が生じ始めると、授業をコントロールするのが楽になります。また、経営学の専門領域とのつながりですが、特に意識せずに取り組んでいます。経営学部の学生は経営学以外の学問に触れる機会が限られています。この授業で経営学とは異なる視点や手法を学んでもらい、その知識をホームグラウンドである経営学に持ち帰ってほしいです。

——授業内容は現代的な話題など工夫をされていますが、内容（取り上げる話題）の変更はその都度行っているのですか

ベースとなるものは大きく変更しませんが、授業で使用できそうな事例があれば積極的に導入します。授業改善アンケートで「学生のことを考えて具体例を紹介してくれる」とのコメントをいただきましたが、自分が面白いと感じたものを提供しているだけです。誰もが知っているベタなものから、知る人ぞ知るマニアックなものまで、バランスをとりながら事例を用意しています。

——テーマとして扱いたいものに関して、日頃の情報収集にどのような工夫をしていますか

社会学者の職業病なのですが、テレビを観ていても、音楽を聴いていても、雑誌を読んでいても、学生と話をしても、「授業で取り上げられるテーマはないか？」という考えが頭から離れません。仕事とプライベートの区別なく、日常のすべてが情報収集です。

——授業で使用するレジュメやスライドの特徴はありますか

文字数は極限まで減らすが情報量は減らさないという方針で資料を作成しています。スライドならば、1枚のスライドに複数のメッセージを入れないようにしています。準備が大変ですが、1回の授業で毎回90枚前後のスライドを用意しています。

——動画を多用されるということですが、どのような動画を利用していますか

セクシャルマイノリティがテーマの回では、宇多田ヒカル、レディー・ガガ、2014年のグラミー賞の動画を流しました。ディズニープリンセスの幸せをテーマにした回では『アナと雪の女王』を観てもらいましたが、セクシャルマイノリティという視点から読み解くこともできるという紹介の仕方をしました。『アナと雪の女王』のように、学生に馴染みのある物語を新しい解釈で説明すると反響が大きいです。

——アンケートコメントに「リアクションペーパーを書くのが楽しい」とありますが、どのように活用されているのですか

90分間授業を完全に聞いていないと書くことができないような問いを設定しないようにしています。時には「この一週間の近況を自由に書いてください」とTwitter感覚で書けるようなものにするので、コメントを書くことに対する学生の抵抗感をなくす工夫をしています。その一方で、リアクションペーパーの評価は厳しくしています。2~3行

だけ書いて提出しても点数を与えないことは学生に伝えて
います。学生にほどよい緊張感をもたせることで、良い状
況を保つことができます。その結果、質量共に読み応
えのあるリアクションペーパーが多いので、私も読むのが
毎回楽しみです。

——大人数授業（いずれも200名規模）という環境の中で、
学生の意欲を引き出すために意識していることはあり
ますか

先ほども話しましたが、「この先生の授業は面白い」とい
う印象をもってもらうことで、学生との信頼関係を構築す
ることです。信頼関係が構築されると、私語や居眠りをし
にくい環境を学生同士で自然と共有するようになります。

——履修者が多い中、学生と意見交換をする機会はいま
すか

学生がリアクションペーパーを書き、翌週に授業の冒頭
でリアクションペーパーの感想を私が話す。この繰り返し
が、意見交換のようなサイクルを生み出しています。授業
後に質問に来る学生もいますので、一部の学生とは直接的
に意見交換をしています。授業で使えそうなアニメや漫画
を学生が紹介してくれるので助かります。

——授業外学修について、どのような課題を出しています
か。また、課題レポートをどれぐらいのペースで出し
ていますか

毎回、授業の最後に次回のテーマと参考資料を紹介して
います。参考資料に関しては、学術書に加えて、小説や映
画も紹介します。課題を与えるわけではなく、参考資料を
学生自身で学修してもらうことになっています。成績は半
期に1回の試験レポートと10回程度のリアクションペーパー
で判断しています。

——学生からのコメントに「レポートが難しい」との意見が
ありましたが、どのような課題を課しているのですか

第1期、第2期ともに、授業内で紹介されたテーマを学生
自身が自由に選び、問いと仮説を立て、それを論じてもら
うという課題を与えています。ただ自分が書きたいテーマ
を選択するのではなく、他の学生がどのようなテーマを選
択するのかを考えるようにと普段から学生に伝えています
ので、それがプレッシャーになっているのではないでしょ
うか。シラバスの到達目標には「自分の問いを明確化にし、
他人に簡潔に説明できるようになること」と書いています。
高校までは与えられた問題に対して答えを探すだけのこと
が多いですが、大学では自分で問いを立て、仮説を設定で
きるのが醍醐味だと思います。

——履修者の7割以上が1年生ということもあり、「高大接
続」の観点から、レポート作成や問いを自分で立てる
プロセス等で、大学の学修に戸惑う学生はいますか

レポート作成の注意点として、先行研究と比較したう
えで自分の意見を必ず主張するようにと伝えます。先行研究

を参照せずに、ただ自分の意見を書くことがオリジナリ
ティであると誤解している学生が多いからです。「巨人の肩
の上に立つ」という言葉がありますが、レポートや卒論作成
に向けて、オリジナリティの意味を理解してもらえよう努
力しています。

——実際にレポートを読んだ感想はいかがでしたか

リアクションペーパーをしっかりと書く学生は、レポー
トのテーマや問いも面白いです。どうすれば他人と差別化
できるか考えたうえでテーマを設定し問いを立てています。
しかし、自分の意見を書くだけのレポートや本の内容を要
約するだけのレポートも多いです。この点が今後の課題で
す。

——全授業を通して、学生にどのような変化を求めています
か

わたしたちが生活する日常の「別の可能性」を感じられ
るようになってほしいです。思想家のベンヤミンの言葉で
「森のなかで道に迷うように、都市のなかで道に迷うには修
練を要する」という言葉があります。迷子になると周りの
風景がガラッと変わり、これまで見えなかったものが見え
るようになります。しかし、意識的に迷子になるには修練
が必要です。私も「社会学」の授業で学生たちを迷子にさ
せたいです。

——次年度に向けて、今後扱ってみたいテーマはありますか

今は「おひとりさま」の空間を取り上げたいと考えてい
ます。ネットカフェのような「おひとりさま」の空間の増
加は、都市に特徴的な現象です。「一人になりたいけれど、
人がいる所にいたい」という矛盾をはらんだ欲望に関心が
あります。カウンターに仕切りのあるラーメン屋やカプセル
ホテルが外国人観光客に人気であることから、「おひとり
さま」の空間は極めて日本的な文化ではないかと考えて
います。

——経営学部で社会学を教えることについて意味があると
感じていることはありますか。また、先生が経営学部
にいたからこそできたことはありますか

これまで社会学部や文学部で教えることが多かったので、
経営学部で教えるのが新鮮です。経営学部の学生に興味を
もってもらえるように、構成や言葉を変えて教えていると、
授業中にそれまでわからなかったことが突然わかり始める
瞬間があります。教えることで学ぶことがとても多いです。
また、私の専門とする社会学は学部内ではよい意味で「異
質」であるため、授業やゼミで私のやりたいことがどんど
ん実現できます。恵まれた環境にいると思います。

——ありがとうございました

インタビュー

学長室 総合経営企画課 大石大祐 相原百合絵

アンケート結果報告

2017年度「授業改善アンケート」について

アンケート項目のリニューアルから3年目を迎え、Web方式にて以下のとおり実施しました。

実施結果

- 第1期) 実施期間：7月3日～7月15日
 対象数：延べ83,586人 (1,325科目)
 回答数：46,831件 (55.9%)
- 第2期) 実施期間：12月4日～12月16日
 対象数：延べ80,348人 (1,497科目)
 回答数：37,288件 (46.4%)

昨年度と比較して、第2期の対象科目数が200科目程度減少したことにより、対象者数も3,000人ほど下回りました。一方で回答数は2,500件程上回ったことで、回答率の向上が見られました。

授業内実施で回答率向上の傾向

C-Learning*によるWeb方式への移行後、低下傾向にあった回答率に一定の歯止めがかかった結果となりました(表1)。特に第2期においては対前年度でプラスに転じており、この間の周知活動や実施実態の検証を自己点検・評価小委員会アンケート部会において進めました。授業担当教員からの実施報告からは、授業内でアンケート回答時間を設け実施した場合と未実施の場合で比較して、前者の回答率が概ね10%程度高い傾向にあることがわかりました。授業時間の確保に配慮した、より効率的かつ効果的な実施方法の確立が課題として挙げられます。

また教員から学生に対するフィードバックとして、それぞれの科目においてコメント入力を実施していますが、制度導入後から年々その割合を伸ばし、本年度はコメント入力率が7割に到達しました(表2)。今後も授業改善ツールとして、学生・教員が一体となって取り組む環境づくりを進めていきます。

表1：「授業改善アンケート」回答率の推移

年度	2015	2016	2017
第1期回答率	64.4%	56.3%	55.9%
第2期回答率	45.7%	41.8%	46.4%

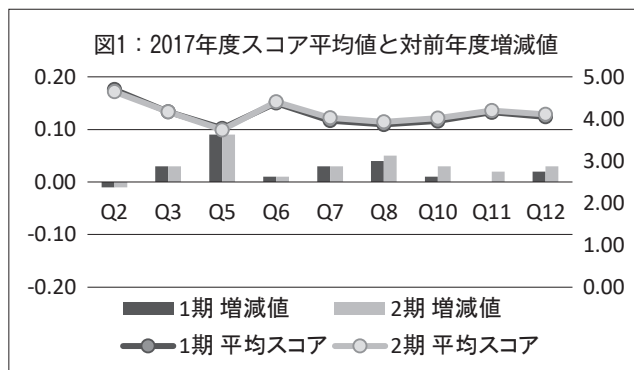
表2：「授業改善アンケート」コメント入力率の推移

年度	2015	2016	2017
第1期入力率	55.8%	64.9%	70.9%
第2期入力率	48.6%	58.3%	69.2%

*Webアンケートシステムのサービス名称

スコア平均値はほぼ横ばい

全学における単一回答選択肢の設問ごとのスコア平均値については、第1期・第2期ともに前年度からの推移は、シラバスに沿った授業かを聞いたQ5を除く各項目で±0.05以内とほぼ横ばいの結果となりました。回答結果については、学部学科により大きく異なるため、その他各種集計と併せて、詳細についてはアンケート報告書をご参照ください。



2017年度「大学院生の教育研究環境に関するアンケート」について

2017年度はその実施時期を前年度と比較して1か月早め、Web方式にて以下のとおり実施しました。

実施結果

- 実施期間：10月2日～10月31日
 対象数：211人 (研究生・科目等履修生含む)
 回答数：108件 (51.2%)

実施期間中に修士論文中間発表をはじめとする一斉周知の機会を設けたことにより、前年度と比較して多くの回答を得ることができました。

回答率向上も、特に教育・学生生活に関する満足度が低下

回答率は前年度と比較して11.6pt 向上し、50%の大体を回復しました。それに伴い集計可能な回答が増えたことと併せて、自由記述による個別具体的な意見・要望についても多数収集することができました。

一方で、一般的にスコア平均値が対前年度で低下しており、特に「教育内容・方法」および「学生生活」においては全項目でスコアの低下が見られ、改善に向けた検討が求められます。詳細についてはアンケート報告書をご参照ください。

2017（平成29）年度外部評価委員会報告

自己点検・評価担当副学長 永田 高英

〈委員会日時〉

2017年12月7日（木）13:45～17:35

立正大学 品川キャンパス11号館11階第5会議室A



2017年度外部評価委員会について

原田委員長（立教大学副総長）を筆頭として、田中委員（株式会社東洋経済新報社執行役員）、藤間委員（熊谷商工会議所会頭）、吉原委員（城南信用金庫顧問）の企業・経済活動関係を中心とした委員4名により、大学基準の一つである「学生支援」から「進路支援について」をテーマとして取り上げました。問答形式ではなく、ディスカッションスタイルにより実施することで、当該テーマに対する本学の実質的な取り組み内容について全学的に把握・共有し、今後のあり方について検討する機会を設けました。大学からは各学部・研究科の関係教員およびキャリアサポートセンター職員等が参加し、外部評価委員との活発な意見交換が行われました。

学生の進路支援に関する事前アンケート

昨年度と同様、各責任主体（キャリアサポートセンター、各学部・研究科）に対し当該テーマに関する事前アンケートを実施しました。その結果、学部生に対するキャリアサポートセンターおよび各学部独自の進路支援についてはそれぞれ概ね充実しているものの、同センターと各学部との有機的な連携はあまり図られていない状況であることが分かりました。また、大学院生に対するサポートが特段実施されていない現状が浮き彫りとなりました。

主な意見交換の内容

卒業時における進路状況把握については、本学は

96.6%と高い数値であるものの、その後の在職、離職等の情報の活用には工夫の余地があり、これらのデータ分析によって、より充実した学生支援の基礎となる情報になりうるのではないかと意見が各委員から出されました。本学側からは、各企業に対し在職者名簿の提出の協力を依頼しているものの、まだそれらのデータを分析し、活用するまでには至っていない現状について説明を行いました。そのうえで、委員からはこれらの情報を積極的に活用することによって本学独自のより細やかな学生サポートに繋がるのではないかと、さらにはこれらの取り組みが面倒見の良い大学としてPRできる要素となりうるのではないかと、との提言をいただきました。

検証

事前アンケートを含めた今回の外部評価委員会全体を通じて、まず、学部レベルで新たに取り組んでいるキャリア教育について、第3期大学評価において強調されている「内部質保証」のPDCAサイクルにおける「P」「D」については把握することができました。他方、「C」「A」については必ずしも意識・実施されていないこと、また、事前アンケートでも明らかになったとおり全学と各学部のキャリア教育上の調整・連携が図られていないことなどが課題として浮かび上がりました。これらの点についてキャリアサポートセンター運営委員会を中心に責任体制を構築する必要があると認識いたしました。

次に、本学のキャリア支援は進路状況の把握率の高さや3年以内の卒業生に対する支援などポジティブな面がありました。その一方で、卒業生に関する情報の把握と活用法が確立していないこと、また、各学部のキャリア支援の取り組みが全学的に集約・調整されていないことが分かりました。いわゆる就職率については気にされているものの、社会貢献大学としての立正大学らしい進路（例えば社会的企業やCSRを重視した企業、NPOなど）の開拓や把握がなされていないことなども明らかとなりました。

さらに、大学院については、各研究科においてキャリア教育が行われていない実態に加え、キャリア支援も全学・各研究科とも固有にはほとんどなされていないことが分かりました。

これらの課題の把握は、今般の外部評価委員会の成果であり、今後の改善に向けた大きな第一歩と言えます。

FD研修会 —立正大学附属立正中学・高等学校見学—

経済学部経済学科 高橋 美由紀 准教授

私のゼミには、三年間に一人くらいのペースで立正大学附属立正中学・高等学校（以下、立正中高）卒業の学生がやってきます。どちらかといえば、おっとりしていて気の良いタイプが多いという印象です。そんな彼らの高校生活を知るためにも、平成29年10月28日（土）に開催された立正中高見学に参加させていただきました。

見学では、大場一人校長を始め、島村雄一中学校教頭、平林重郎高校教頭にも大変お世話になりました。大学からの参加者も多く、学長を含め、22人でした。

蔵書も立派な図書館を起点として、電子黒板を使用した中3特進コースの英語授業の見学と電子黒板の説明、行学ホール、アリーナ（体育館）、ランチルーム、武道場、弓道場、コンピュータールーム、書道室などの見学をさせていただきました。校舎内は、廊下や階段も木を用いた落ち着いた雰囲気でしたが、中庭テラスもウッドデッキで、和める感じでした。

校庭ではサッカーに打ち込む生徒の姿も見られ、すれ違う生徒は「こんにちは」と挨拶を交わしてくれ、気持ちよい印象を持ちました。家庭科のエプロン姿の生徒も楽しい感じでした。また、廊下で目にした生徒の美術の作品は、なかなか素敵でした。

最初に訪れたのは、iPad と電子黒板を用いた先進的な英語の授業でした。生徒がiPadに文字を書くとき電子黒板に映し出されますが、一人の男子学生が“Welcome to Rissho High School!”と書いてくれたのが、何とも愛嬌があり嬉しく思いました。電子黒板



iPad は生徒全員に貸与



電子黒板を用いた授業風景

には、教科書のテキストを写し出すことも出来ます。そして、その一文の節を切り取って自由自在に動かして並べ替えたり、赤や青で字を書き加えたりと、かなり多くのことが可能であることが分かりました。生徒は、熱心に先生の説明に聞き入っていました。行学ホールでは、可動式の椅子もさることながら、安置されている仏像についての説明をいただき、スペース上の都合から光背の代わりに曼荼羅の「蓮」の字が仏像の頭の上に来ようになっていることなどを伺い、興味深く感じました。今は新しい木の香りのする仏像ですが、何年かの後には色も少しずつ濃くなり、重厚さも増してくるだろうと思いました。

ランチルームでは、「大学の学食より美味しそう」という見学教員の声も（笑）！たこ焼き（150円）に魅力を感じていらした先生もいらっしゃいました。設置されている自動販売機も、立正のスクールカラーの緑で統一されており、清々しい印象を持ちました。また、武道場では男子ばかりではなく女子も柔道をしている姿が新鮮でした。

廊下には、インターハイで活躍した生徒の名前が貼り出されていましたが、「6年××君」のように、中高に亘る学年制度を使用していることを知りました。

弓道場や武道場、温水プール、屋上のテニスコート、ゴルフの練習場所など、大変充実した綺麗な施設で生徒はクラブ活動に打ち込むことができると痛感した見学会でした。